

解 説



品質工学研究の歴史と発展 (II)

— 人的ネットワークの視点からの考察 (2) —

History and Growth of Robust Quality Engineering Studies (II) — Consideration from the Viewpoint of Human Network (2) —

浜田 和孝*

Kazutaka Hamada

鴨下 隆志**

Takashi Kamoshita

矢野 宏**

Hiroshi Yano

3.3 電気・電子・半導体・通信機器関連企業の調査

品質工学の発表が多い、アルプス電気(株)、新電元工業(株)、三菱電機(株)について調査を行った。

(1) アルプス電気(株)

以下はキーパーソンの宇井友成からの情報をもとにまとめた。

アルプス電気には、リーダーとして谷本勲がいた。谷本は、中国の安価な製造に勝つために開発、製造のドラスティックな革新の必要性を強く認識し、開発期間短縮と評価の効率化に取り組むため、その手段として品質工学を導入した。‘一発完動’というスローガンのもと、Digital Manufacturing活動(DM活動)を展開した¹³⁾。谷本は2010年から品質工学会副会長を務め、2016年から第10代の会長に就任している。

社内展開に当たり、「当初は適用することに重きがあったが、やがて有効な事例が出てきたこと、大規模に通信教育を利用した社内教育を実施したことにより急速に社内展開が図られた」ということである。それを中心になって実務面で先頭に立って進めてきたのが宇井で、2012年時点でも同じ立場で活動中である。「2009年にトップ交代後、全体的な流れは緩やかになったものの、有効な手法として一般的に認識されている。Digital Manufacturingという枠組みの中でプロジェクト的に進めていたも

のを通常業務として実施するようになったし、従来の枠組みにとどまらない広範囲な研究が増えている」と述べており、強力なリーダーが退いた影響は認めつつも、現在では必要性を感じた部門、技術者が通常業務として適用する土壌ができあがっていることがうかがえる。

宇井を筆頭に、上杉一夫、中沢和彦3名の専任と、佐々木市郎、三森智之ら13人の兼務のメンバーからなる全社推進組織が中心となり、実施事例で参考になるものは社内論文化しており、まず成果を社内一元化し、共有化できるようにしている。

大会発表について、「社内論文の中で特に参考になる事例について大会発表を行うことが多く、大会発表のテーマ抽出、発表者の人選、発表予稿の推敲等については、品質工学推進のチーム活動で取り組んでいる」と述べており、発表までの仕組みやフォロー体制も充実している。大会発表は、「発表者当人の修行の場」というように、発表・議論を経験することに重きを置いており、大会発表は、品質工学の研究成果を単に発表するだけでなく、社内のQE推進のPR、個人のQE知識のレベルアップ、さらには学会最新動向を収集する場としても活用している。

一方、論文投稿に関しては、「品質工学推進のチームが内容を精査するが、投稿するか否かは本人次第」として、特に推進チームとしても大会発表ほど重きを置いていない。「大会発表の方が社内での注目度は高く、学会誌に掲載されても高い評価にはつながらない」という実情から、論文投稿は自己啓発の意味合いが強いようである。

* Hamada Quality Solution

** 応用計測研究所(株)